

「冬の夜長は昔話で」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

小学一年生の国語の教科書

をひも解くと、一月頃に昔話の授業を行う内容になっている。この時期に昔話を取り上げるのは、もともと昔話の語りが、おもに冬に行われたことと無縁では無いように思われる。考え過ぎであろうか。

昔話は「むかしむかし」という言葉で始まることに特徴がある。昔話は、「むかしむかしある所におじいさんとおばあさんがいました」等のよう



家族が集う
囲炉裏端は
昔話語りの場

に、場所も時代も人物も特定されることはない。作者は不明であり、中には古事記にも出てくるような話もある。昔話には時代を超越して人々に喜びや感激、勇気等を与えてくれるものがある。そして何よりも昔話は、空想世界の物語であり、居ながらにして聞き手を異次元の世界へと誘いこんでくれる。そのうえ話の筋が単純明快である。そうしたことから長きに渡り多くの

人々の間で愛され伝えられてきた。こうした昔話が盛んに語られた時が、農作業が一段落し夜なべ仕事も少なくなった冬の晩だったのである。

人から人へと語り伝えられて来た昔話には、どれ一つとっても全く同じ言葉で語られるものはない。粗筋は同じであっても土地により語り部によっても多少異なる。例えば教

科書や絵本以前の「桃太郎」の話の場合、宇都宮あたりでは、川上から流れてくる桃は、悪い桃あるいは白い桃と良い桃あるいは赤い物との二つである。そしておばあさんが「悪い桃(白い桃)あっちへ行け、良い桃(赤い桃)こっちへ来い」とい

と、悪い桃(白い桃)は泣く泣くあっちへ行き、良い桃(赤い桃)がやってきた」という内容になっている。「猿力二合戦」では、カニの助太刀をして猿を懲らしめるのに栗・蜂・白が登場するが一般的である。ところが宇都宮あたりでは、他に牛の糞が登場し、「蜂に刺された猿が慌てて家を出ようとする」と牛の糞に滑って転び、そこに白がドスンと飛び降りて猿を懲らしめる」という内容になっている。

昔話の語りの場も土地によつて異なる。一般的には囲炉裏端であるが、県東部の葉煙草栽培が盛んに行われた地域では、台所が昔話の語りの場ともなった。晩秋台所で夜

更けまで行われる葉煙草のしには、子どもも手伝わされたが子どもは眠気覚ましに昔話が語られたという。芳賀地方の一部では、庚申講の場が昔話の語りの場ともなった。庚申講はご本尊の青面金剛を信仰するもので、一家の主が当番宿に集まり徹夜で行ったものである。当番宿では、夜遅くなった頃に昔話が語られた。もちろん子ども向けの昔話ではなく、笑い話や艶話等大人向けの話である。大人たちの笑いを誘い、あるいは眠気を覚ますために語られたのである。

こうした昔話ではあったが、昔話を殊の外熱望したのは子どもたちである。市内篠井辺りでは、昭和三十年頃まで昔話を語る古老がいたという。昔話の季節である冬の夕食後のひと時、囲炉裏端で昔話が語られた。昔話の本場の旧栗山村の語り部に比べれば、篠井の語り部のレパートリーは少ない。それでも夜になると「昔話を」と子どもたちはせがんだという。昔話は単に語る・聞くというだけでなく、年寄り子どもたちを繋ぐものでもあった。冬の夜長、ゲーム機に代わって生の昔話も悪くない。